

国税局

消えた政治献金

査察部

立石勝規

徳間文庫



こくぜいきよく さつぶ
国税局査察部

消えた政治献金

© Katsunori Tateishi 1996

1996年2月15日 初刷

著者 立石勝規

発行者 徳間康快

東京都港区東新橋一―二一〇五
発行所 株式会社徳間書店

電話(〇三)三五七三・〇一一(大代)
振替 〇〇一四〇―〇―四四三九二

印刷 凸版印刷株式会社
製本

〈編集担当 本間 肇〉

ISBN4-19-890465-0 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳間文庫

国税局査察部

消えた政治献金

立石勝規



徳間書店

目次

1	奪われた五億円	7
2	二重尾行	21
3	赤い手帳	39
4	ササツ分室	58
5	田中角栄の写真	67
6	密約	80
7	対決	108
8	復讐	122
9	謎の男	138
10	消された百三十八億円	157
11	ライバルの面影	174
12	大物政治家の影	196
13	逆転	215
	「あとがき」にかえて	244

主な登場人物

高山信一郎（保守党前幹事長・最大派閥『清風会』会長）

井上正彦（高山信一郎秘書）

石井竜平（新日本製薬総務部次長）

真島友治（新関東開発社長）

雨宮士郎（新関東開発常務）

秋元幸司（新関東開発顧問弁護士）

小林聡美（銀座アート企画社長・クラブ『ラポール』のママ。真島の愛人）

丹下厚之（銀座アート企画専務）

千葉礼子（『ラポール』の経理担当）

米山邦靖（緑青販売社長）

福原剛（緑青販売副社長）

伊藤文康（京橋第一興信所主任調査員）

四方俊久（金融コンサルタント・元銀行秘書室長）

奥山悟（暴力団関東順栄会二代目会長）

今本隆也（暴力団関東順栄会今本組組長）

〈東京国税局査察部〉

田村勇二（査察管理課課長）

湯浅徳治（査察総括一課課長）

菱沢直輔（査察総括二課課長）

杉滝隆一（査察第一部門総括査察官）

松尾寛蔵（査察第一部門総括主査）

砂川淳次（査察第二十一部門総括主査）

(本書に登場する人物、企業、団体などは
すべて架空であることをお断わりします)

1 奪われた五億円

1

シルバーグレーの大型乗用車が地下駐車場にゆっくり入って来た。車はちょっと止まった後「コの字形」の通路を右に曲がった。慎重な運転ぶりから見て、運転者がここに来るのは初めてのようなのだ。

車が通った後、コンクリートの通路に雨に濡れたタイヤの跡がくっきりとつく。かなり激しく降っているらしい。夕立か。ついさっきまで青空が見えていたのに。

プレートに「物置場」と書かれた扉の前に、背広姿の男が一人立っていた。車はその男の前で止まり、中から女が降りてきた。乗っていたのは彼女一人らしい。

薄暗い駐車場でもはっきりと見えるほど、鮮やかな紫色のワンピースを着ていた。昨夜は遅かったのか、化粧気のない顔は、はれぼったい。長い髪を無造作に水色のハンカチで束ねてい

る。

最初に声をかけたのは女の方だった。

「失礼ですが井上さんですか」

男は四十代半ばぐらいか。細身の体を少し曲げ、軽く頭を下げた。背は女よりちょっと高い。

「はい。高山の秘書の井上です。お手数をおかけします」

「小林聡美」と名乗った女は、三十歳を少し超えているかなという感じだが、かなり世慣れた雰囲気を持っている。車のトランクに歩き始めた時、男は人差し指を駐車場の天井に向けながら低い声で言った。

「すいませんが車をもう少し壁の方へ寄せてくれませんか」

井上と名乗った男が指さした天井には、監視用カメラがあった。カメラは一階にある管理入室のモニターにつながっている。男が立っている物置場前との壁際は死角になっている。

女は男の言っている意味がすぐ分かったようで、軽くうなずいて、車のハンドルを二度、三度と切って壁際に寄せた。

開けた車のトランクには、緑色の大きな紙袋が三個入っていた。ゴルフ場の名前が印刷されている。コンペの後の賞品やおみやげを入れるのに、使われるものらしい。

女は、

「どうぞ」

というように、手を紙袋に向けた。気になるのか、ちらっと監視カメラを見た。

男は、

「大丈夫です。映っていませんから」

と言いながら、紙袋を一つずつ、用意していた台車に積んだ。両手で運んでいるところを見ると、中身は相当に重そうだ。

積み終えた男は、女に自分の名刺を渡した。

名刺の裏の日付と『確かに受領致しました』とボールペンで書かれた字を確認した女は、なにも言わずに車に乗り込み、一方通行の駐車場から、まだ雨の降る街へ出て行った。

物置場の横にドアがあり、ドアの向こうにエレベーターがある。ドアにはいつも鍵^{かぎ}がかかり、鍵を持っているマンションの住人と管理人、清掃作業員しか自由に出入りできない。これ以外の人^{ひと}が駐車場からマンションに入るには、管理人か住人をインタホンで呼び、鍵を開けてもらうシステムになっている。

男は誰もいないことを確認した後、エレベーターに通じるドアを開けずに、壁際沿いに台車を押して、出口近くの隅に止めてあった白い乗用車に向かった。トランクを開け、女から受け取った三個の紙袋を積み込んだ。彼は再び物置場の前まで戻り、扉を開け台車を中に入れた。

中は意外と広い。モップや十個ほどのポリバケツが並べられている。

雨のせいで駐車場はさして暑くもないのに、男の額にはうっすらと汗がにじんでいる。彼は

ぎくりと立ち止まった。並んでいるポリバケツの陰からうなり声が聞こえた。そこには彼と同年代の男が気を失って倒れている。かすかだが、その男が息を吐くたびに、病院でよく嗅ぐ消毒薬のような臭いがする。

彼は男がまだ目を覚ましていないことを確かめ、物置場の扉を閉めた。

白い車が駐車場から外に出た瞬間、真っ黒な空に稲妻が二度走り、一瞬辺りが明るくなった。マンションと狭い通りを隔てた木立の向こうに靖国神社の鳥居が浮かんで、すぐ消えた。男はバックミラーに映る、今、駐車場を出てきたレンガ色のマンション『パールロイヤル』を見た。国会議事堂や保守党本部から、車で十分とかからない九段北のこのマンションには、有力政治家の事務所が数多く入っている。

彼は腕時計を見た。午後三時十分。女の車が現れてから十分しか経っていない。その間、誰一人駐車場には現れなかった。それを一番恐れていた。

その日は木曜日だった。道はすいていた。街のいたるところに大きな顔写真を刷り込んだポスターが張られている。消費税の導入を最大の焦点とした、第十五回参院選挙が三日後に迫っていた。一九八九年七月二十日のことである。

物置場で倒れていた男が、意識を取り戻したのはさらに十分後のことだった。猛烈な頭痛と吐き気が襲ってきた。最初は自分が今、どこにいいのかも分からない。近くにある事務所の台

車を見て、ようやく少しずつ思いだしてきた。今日は木曜で事務所に出てきた。午後三時少し前に事務所の台車を押して、エレベーターで八階から地下に降りた。ドアを開け駐車場に出た途端に、誰かに後ろからはがいじめにされたまでは覚えている。

口をタオルのようなものでふさがれ、その瞬間、鼻から頭を突き上げるような臭いがした。後はなにも記憶がない。気を失ったようだ。腕時計を見ると午後三時二十分。約束の時間はすでに過ぎている。駐車場には彼が待っていたシルバーグレーの大型車は見あたらない。

「盗^とられた。五億円を盗られた！」

誰かが事前に金が運ばれることを知って、駐車場で待ち伏せていたのだ。

「いったい誰だ」

五億円のことを知っているのは、自分と「おやじ」と献金者のゴルフ場開発会社の社長、金を運んでくる社長の愛人だけだ。どうして、どこから漏れたのか。そんなことより警察に知らせないと。

「慌ててはだめだ。五億円は裏金から回した可能性がある。だとすると、警察に連絡するのはまずい。まず、おやじに報告しなくては」

まだ痛みの消えない頭を振りながらエレベーターに通じる通路のドアを開けた。エレベーターは地下にそのまま止まっている。彼が降りた後、誰も使わなかったようだ。エレベーターが動き出すと、さらにひどい吐き気が襲ってくる。やっとの思いで八階にある事務所にたどり着

いた。

扉に張られているプラスチックのプレートには、こう書かれている。

『高山信一郎事務所』

「おやじ」

と言っていた人物は、保守党最大派閥の清風会会長、高山信一郎のことである。党の幹事長を務め、陰の総理、キングメーカーと呼ばれている人物だ。物置場で倒れていたのは高山の第一秘書の井上正彦である。彼は二十年以上も高山の秘書を続け、政治資金のいっさいを処理していた。

派閥の中堅クラスの国会議員でさえも、井上には頭が上がりないと言われるほどの実力秘書である。中央省庁の局長で彼に呼ばれ、すぐに事務所に飛んで来ない者はいない。

2

この日、高山は参院選挙に備え、静養のため長野県内にある別荘に出かけていた。井上から電話がかかってきた時、一緒に来ていた側近の国会議員二人、高山と結びつきの強い大手建設会社の役員とマージャンを楽しんでいる最中だった。

彼のマージャン好きはよく知られている。東京の麴町こうじまちの自宅とこの別荘に自動マージャン

卓を備えた娯楽室をわざわざ設けているくらいだ。

「井上か。なんだ、急用か」

隣の応接室で電話に出た高山の太い声が、廊下伝いに残った三人に聞こえてくる。マージャンで大きな手を上がったばかりなので、機嫌がよかった。電話の相手が秘書の井上と知って三人は顔を見合わせる。よほどのことがない限り、長野の別荘に電話をかけてこないことを知っていたからだ。

「よく聞こえんぞ。なにかあったのか」

井上はよほど慌てているらしい。

「例のものは受け取ったんだろう。なに、本当か！」
急に声が低くなり、三人には聞こえなくなった。

応接室に高山と一緒にいた長男の信基が娯楽室に現れた。

「すいませんね。電話が長くなりそうなので、私が代わりにやります。さあ続けましょう」

自宅の住所にちなんで『麴町の女帝』と呼ばれている高山の妻、優子が昨年十一月に急死して以来、別荘には信基がついてくるようになった。先日、優子の遺産額が税務署に公示され、六十億円という金額が話題になっている。

再び娯楽室に姿を見せた高山の顔は真っ赤で、厚い唇は震えていた。

「井上の奴どじりやがって……」

吐き捨てるように漏らし、信基の後ろに立ったが、すぐにまた応接室へ戻って行った。電話をかけに行ったのだ。

高山が電話した相手は井上である。警察へ届ける必要がないことをもう一度伝え、最後にこゝう念を押した。

「誰にも口外するんじゃないぞ。新関東開発の真島には明日、おれの方から言っておく。いいな。分かったな」

ひたすら「申し訳ありません」を繰り返す井上の頭を下げている姿が、高山には見えるようだ。

「おい、少しは薬になったろう。お前は最近ちょっと調子に乗っていたからな。まあ、薬代としては少々高くついたが」

と言って高山は電話を切った。

しかし、この連絡の後で、井上が別のある人物に電話で「金を盗られた」ことを知らせたのは、高山は全く知らなかった。

そのもう一人の人物との話がすんだ井上が窓の向こうを見ると、いつの間にか雨はやみ、日が差し始めていた。窓を開けると、靖国神社の木立を抜けたひんやりした風が事務所に流れ込んで来た。

3

七階建ての衆院第一議員会館の最上階にある保守党国会対策副委員長、田辺主税の部屋からは、駐車場と道をも一つ隔てた首相官邸がよく見える。すぐ近くの国会議事堂へ向かう自衛隊カンプボジア派遣反対のデモ隊が、朝から断続的に続いている。

一九九二年夏、PKO（国連平和維持活動）協力法が国会で成立したのを受け、政府は九月、自衛隊をカンボジア派遣している。第二陣の派遣も伝えられ、反対運動は十二月に入っても続いていた。警視庁による警備も強化され、警備車が官邸の周りを隙間なく^{すきま}囲んでいた。

「補正予算の折衝もやまを越えたね」

「野党の一部が条件つきながら賛成に回ってくれそうだから、めどはついたよ」

田辺が補正予算案審議の進め方を相談しているのは、同じ派閥の清風会に属する衆院予算委員会理事の三上利孝だった。派閥会長、高山の側近である二人は、国会運営、野党対策のお目付け役を担っている。

二人はソファに腰を沈めたまま話を続けた。

「おやじさんもそれでいいのだろう」

「さっき事務所で会って確認してきた」